

NO. 36
March '04

newsletters

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート

サード・ウェイヴ・フェミニズム！

飯田 祐子

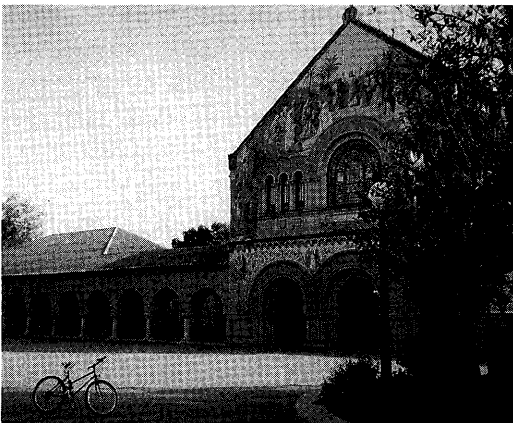
2002年の夏から一年間、米スタンフォード大学に留学し、私は、はじめてサード・ウェイヴなるものに出会った。フェミニズムに関わって、すでに15年ほど。婦選運動を中心とした第一波と、70年代以降の第二波については知っていたけれども、第三波があるとは知らなかった。いろいろと読むことになった第三波のフェミニストの主張には、いくつかの点で非常に深い共感を覚え、まさに自分の世代のフェミニズムに出会った気がした。

サード・ウェイヴという言葉は、90年代初頭に出現している。代表的な著作と言われている「To Be Real: Telling the Truth and Changing the Face of Feminism」(Rebecca Walker 編)や「Listen Up: Voices from the New Feminist Generation」(Barbara Findlen 編)はともに1995年に出版、それらに比べてよりアカデミックな論調でまとめられた「Third Wave Agenda: Being Feminist, Doing Feminism」(Leslie Heywood and Jennifer Drake 編)の出版も1997年と新しい。第一波と第二波の隔たりは時代的にも思想的にも大きいので、それぞれが異なることはわかりやすいけれど、第三波を第二波から隔ててどのように定義するか、実はそれほど明確ではない。ただ、基本的に重要なのは、思想の内容の差というよりは、世代差が強調されていることだ。第二波フェミニズムの功績で、大学で女性学やジェンダー・スタディーズを学び、その後のフェミニズムへのバックラッシュを体験してきた世代が、

第二波を担ってきた世代に対する違和感を表明しつつ語りだしたフェミニズムがサード・ウェイヴである。その意味で、第三波というより、第三世代と呼んだ方が正確ではないかと思う。

すでに学問の場にすらフェミニズムがある時代に育った世代は、女性としての抑圧をそれほど強く感じていない。自分に対する自信も十分にある。女性の一人であるという意識より、女性として一括りにされることへの違和感を強く感じていて、私とあなたは同じ女でも違う抑圧、違う問題に出会っているというリアリティの方がよほど大きい。女性を一括りにして扱うことへの批判は、もちろんまさに第二波が生み出したものであって、サード・ウェイヴを語るフェミニストたちは皆そのことをよく認識している。第二波との断絶を強調しているのではなく、むしろ、第二波フェミニズムをヴィクティム・フェミニズムとして否定したパワー・フェミニズムを批判し、異なるやり方で第二波が生んできた連帯の方法を探り直そうとしているのである。多様性と雑種性を非常に重要な前提とした上で連帯を考え、また経済的な成功を目標にすることを疑う。不況の中で育った世代として、将来に対する経済的な不安は具体的に非常に大きく、市場経済の中で自由競争を根本的に問い直し、働き方を考えようという。さまざまな交渉を試みながら、そしていかにサバイヴしていくかということを開く視点は、私にとって、非常に親近感を覚えるものだった。日本文学を対象として研究してきたけれど、このところ考えてきているのは複数の異なる「聞き手」とどのように交渉しながら語るかという、「語り」というより「語りにくさ」の問題で、言葉にしたいと思ってきた不自由さと不屈さの感触は、第三世代の語るフェミニズムとたしかに重なると感じたのである。

(文学部助教授：日本文学)



神戸女学院への想い

鈴木 信一

過日、定年退職をひかえた私に、女性学インスティテュートから「ニュースレター」の原稿依頼がありました。心に残っていることを書いて学生の皆さんへのご挨拶に替えたいと思います。

神戸女学院には正味41年お世話になりました。始まりは、東京オリンピックの突貫工事にわいていた昭和38年の文書課からです。昭和30年代は日本経済が走りはじめたところで、大学進学率が10%台から20%に上がり、大学の規模も拡大しつつありました。しかし、神戸女学院は拡大路線を選ばず、少人数教育による堅実な経営がなされてきました。私は、これまで、比較的皆さんの顔の見える職場で過ごし、教育現場にかかわることができました。

振り返ると、私が41年もの間、岡田山で過ごせたのは、皆さんの直向きさからエネルギーが、また岡田山の自然から癒しが与えられたからだだと、深く感謝しています。私の神戸女学院への気持ちは、仕事における目的意識とそうした自覚によって養われたものでしたが、その変化は、加えて皆さんへの思い入れと期待感を大きくしました。

卒業した皆さんの先輩たちが、大都会のコンクリートジャングルの勤務ではじめて(ようやく?)岡田山の自然の豊かさを感じずとは、よく聞く話です。「魂の渇き」ならぬ「自然の渇き」です。私の皆さんへの期待は、自分の色を出せるような生き方をしてほしいことです。そのために、天の恵みである4年間という時間を大切に使ってほしい。しっかりと自分の色をつかって卒業して行っていただきたいと思います。

いつのころからか、食卓のトマトの色、香り、味が薄くなってきた気がします。トマトってこんなんだったかな、と感じた経験はないでしょうか。なぜ、顔のない食材が出回るようになってきたのでしょうか。その事実は、消費者動向を反映した市場原理にすぎないのでしょうか。今ははっきり言えることは、さまざまな食材、品種の中から、消費者自身が自分に合ったもの、必要なもの、確かなものを選ぶ選球眼が必要になったということです。不安やリスクの多い現代ですから、本物のトマトをいかに探すか、ノウハウが問われるかもしれません。ものを選ぶとはそういうことです。本当の自分を探すことも同じです。色や顔のないままでも人生ですが、潜在的な個性や能力を私蔵して生きるの、いかにももったいないことと思われれます。今後の皆さんのご活躍を祈ります。

(神戸女学院総務部長)



『女と男』

骨太な女たち

生野照子

近ごろオバサンが元気だ。その数人を紹介しよう。

Aさんの長男は、重い障害をもっている。その後もう一人の子をもうけたが、不慮の事故で失った。彼女は失意から立ち直り、地域に障害児施設を建設するための運動をはじめたのだ。仲間を募り、行政に掛け合い、空き缶収集などで資金を集めた。長年の奮闘が続いたが、しだいに協力者が増え、なんと3か所の作業所を作るに至ったのである。ところが、常に行動を共にしていた夫が急死。どうなるかと心配したが、彼女は再び立ち上がった。遺産を投じて土地を購入し、今度は障害者のグループホームを作ったのである。苦労にもかかわらず、彼女はいつも周りを「癒す人」である。オバサンパワーをフル回転し、その笑顔で「障害」を「恵み」へと開花させている。

Bさんは医師であるが、患者の評判高く、同僚の信頼を集めていた。しかし、40歳半ばで医長の座を辞し、自分探しの放浪へと旅立ったのである。「医者腕はついたが、閉じこもっているのは、人間としての腕がくすぶってしまう」と彼女は言う。その後3年、さまざまな国から便りをよこしてくれる。土着の生活に入り込んで友人を作り、精神的に世界の今を体験しているようだ。知識や技術に奢らず、己の原点を固めようとする彼女こそ、他人の心身を預かる職業にふさわしいと思える。帰国すれば、スケール大きい医療を展開するだろうと、今から楽しみである。

Cさんは30歳で夫が急死した。途方に暮れたが、心機一転して英国に渡り、画家への夢に挑戦することにした。後戻りできない思いで語学や美術を学び、大学に入学し、大学院にまで進んだ。そして、主婦時代にやっていた刺繍を生かし、独特の画法を編み出したのである。65歳の今でも大作をこなし、美術館に買い上げられるほど国際的な芸術家になっている。数年前にガンを宣告されたが、それならばと、内臓をモチーフにした作品を仕上げたツワモノである。

骨太な生きざまをみせる彼女たち。議論をてらわず、自然体に、しかし確固として行動に移している。そして、度量がある。彼女たちからの心地よい刺激は、明日への眼を開かせてくれる。

(人間科学部教授：心身医学)

『女と男』

男の中の女の中の男の中の…

渡部 充

女子大に奉職して早15年。初めは回りがほとんど女性という環境にドギマギしたものだ。女性に免疫のまるでないウブな若者だったから、廊下を歩く時など、まともに顔を上げられないほどであった。あれから15年。何事にも慣れというものはあるものだ。学生も女性ばかり、同僚や上司もかなりの数が女性という状況にすっかりなじみ、いつの間にかそれが当たり前となった。たまに電車などで若くてカッコいい男の子を見つけると、つつい見とれて何だかドキドキしてしまうのだ。

これは、単に若い男を見慣れないということかもしれない。だが、それだけでもなさそうだ。普段接している女子学生たちのまなざしを自分の中に取り込んでしまっているためではなかろうか。もちろん私の中に創られたイマジナリーな《女子学生》のまなざしではあろうが。学生とコンパに行き、一緒にウェーターの「品定め」に夢中になっていたこともあった。

今カッコいい男と言えば「ベッカム様」だろうか。独特のフォームから繰り出されるフリー・キックなど惚れ惚れするほど美しく、カッコいい。だが、彼のルックスはカッコいいと言うよりむしろカワいいのである。どこか寂しげな雰囲気表情は、男性スポーツ選手に期待されがちな「男らしさ」よりは繊細さを感じさせる。逆に今人気の女性はと言うと「ハンサム・ウーマン」などと言われるように、どちらかと言うとこれまで男性のものとされてきたカッコよさを備えた女性ではなかろうか。

どうやら、カッコカワいい男と、カワカッコいい女が支持される時代ようだ。男のまなざしと女のまなざしが微妙に混じりあう時代。ユニセックス化などと言うが、それは文化としての性差がなくなってひとつに融合することではなく、文化的性差を、生物的性差とは関係なく誰もが状況に応じて使い分けることを習得しつつあるのだろう。ますます複雑になる世の中、窮屈だが単純な「男らしさ」、「女らしさ」に囚われていた時代が懐かしくもある。しかし、もはや後戻りはできない。そうした呪縛から解放されて楽しく生きていくすべを模索するしかないのだ。

(文学部助教授：イギリス文学)

2003年度年間活動報告

I 講演会・セミナー等

[前期開催分については前号を参照のこと]

学外講演会

会場：宝塚市立男女共同参画センター・エル

<第1回>2003年10月30日(木)

「老年期のメンタルヘルスを考える―夫婦で

『もうひとつの人生』を支えあうには―」

講師：荒賀文子氏

(神戸女学院大学文学部助教授：社会福祉学)

<第2回>2003年11月29日(土)

「近未来の食生活」

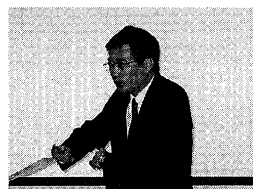
講師：寺嶋正明氏(神戸女学院大学人間科学部教授

：食品分子機能科学)

[出席者：第1回42名/第2回20名]



荒賀文子氏



寺嶋正明氏

報告会 2004年1月20日(火)

「サード・ウェイヴ・フェミニズム！」

会場：神戸女学院大学ジュリア・ア・グッドレー館会議室

講師：飯田祐子氏

(神戸女学院大学文学部助教授：日本文学)

[出席者：20名]



飯田祐子氏

II 研究助成

「ロレンスの小説における強い女と弱い女の

レトリック」 平井雅子 [文学部・教授]

III 学会等出張補助(国内・海外)

2003年度は申請なし。

IV 授業(科目名：Cu234「女性学」他)

前期はCu234(1)「女性学」[主題コース]として本学にて開講し、後期は西宮市大学交流センターにて「ジェンダー論」[共通単位講座]として開講した。

V 学生懸賞論文(「女性学インスティチュート賞」)

2003年度(第5回)の選考結果は以下の通り。

<優秀賞>(2編):賞金 各2万円(賞状)

岩崎かおり氏(神戸女学院大学人間科学部人間科学科2003年3月卒)

酒井博子氏(神戸女学院大学人間科学部人間科学科2003年3月卒)

なお、表彰は2003年10月17日(金)神戸女学院講堂において学院の各種記念賞授与式とあわせて行われた。

VI 出版物

『女性学評論』第18号

特集:女性と教育 (2004年3月発行)

「ニューズレター」No.35 (2003年10月発行)

「ニューズレター」No.36 (2004年3月発行)

—— ディレクター就任 ——

女性学インスティチュートディレクターに2004年4月1日より高橋友子文学部助教授が就任の予定。任期は2006年3月31日までの2年である。

— 2004年度(第6回)学生懸賞論文募集 —

賞の名称は「女性学インスティチュート賞」。対象は本学学生(学部生・大学院生)及び2003年度の本学卒業生・修了生が執筆した女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文。最優秀賞論文(1編)には賞金5万円及び賞状、優秀賞論文(2編)には各2万円の賞金及び賞状が授与される。また最優秀賞論文については『女性学評論』第19号(2005年3月発行予定)に全文が掲載される。締切は2004年7月26日。選考結果の発表及び表彰は2004年10月中旬の予定。詳細は当インスティチュートまで。

—— 2004年度前期講演会等のご案内 ——

■特別講演会

日程:2004年6月4日(金)10:20~11:10

会場:神戸女学院講堂

講師:大貫恵美子氏

(米ウイスコンシン大学教授:人類学)

<申し込み:不要、受講無料>

■連続セミナー「文学に描かれた女性(仮)」

日程:2004年6月11日~7月2日間の金曜日、

14:00~15:30、全4回

会場:神戸女学院大学教室

講師:<日本文学>蔵中さやか本学文学部助教授

<英文学>平井雅子本学文学部教授

<独文学>孟 真理本学文学部教授

<仏文学>上西妙子本学文学部教授

[担当順]

定員:30名 *3回以上の出席者には修了証を発行

<申し込み:要、受講無料>

新プログラム

女性学インスティチュート
<インターディシプリナリー・プログラム>

2004年度より、本学で開講される科目のうち、女性学やジェンダーの視点を取り入れたものを在学期間中に10単位[「女性学」または「ジェンダー論」(西宮市大学交流センター「共通単位講座」)は必修]取得した学生に、同プログラムの<修了証>が交付されます。

各年度において該当する科目は、年度始めにブラック・ボードで告知されます。なお、2003年度までに学生が取得した「女性学」または「ジェンダー論」の単位も、履修認定の対象となります。

<修了証>の交付を希望する学生は、必要単位の履修を証する書類(成績表等)をインスティチュートまで提出して交付を受けてください。

図書・資料をご利用ください

女性学インスティチュートでは、女性学、ジェンダー・スタディーズ関係の図書・資料の閲覧・貸出を、下記の要領で行っています。

◎開室時間 月~金 8:30~16:30

但し、夏・冬期休業中の一定期間は閉室となります。

◎利用資格 本学教職員・学生・卒業生

◎閲覧 開室時間中は自由にご覧ください。

◎貸出期間 2週間

◎貸出冊数 8冊まで

★女性学インスティチュートは図書館本館1階にあります。

2003年度女性学インスティチュート編集委員

三杉圭子、清水忠重、塩見尚史、高橋雅人、上西妙子(委員長)(ABC順) 編集事務:豊福裕子

編集・発行:神戸女学院大学女性学インスティチュート

☎662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL/FAX:(0798)51-8545

E-mail:gender@mail.kobe-c.ac.jp

URL <http://www.kobe-c.ac.jp/gender/>